

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

## 図書室月報

2024年(令和6年)  
8月5日 第735号

PDF版

国立市中 1-15-1  
TEL.042-572-5141  
FAX.042-573-0480  
国立市公民館

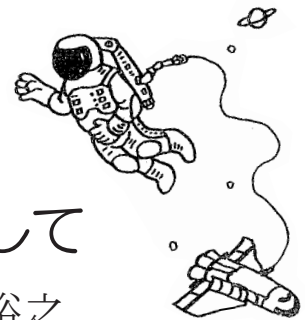
〈2024年3月30日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

あがた

縣秀彦 著

『ヒトはなぜ宇宙に魅かれるのか  
天からの文を読み解く』に参加して

八木 裕之



誰もが夜空の星に魅せられたことがあるのではないでしょう。私も子どもの頃、図鑑を片手に星座を探したり、流れ星を長い時間待っていたりしたことを思い出します。そういった意味では星空は宇宙の中で一番身近で興味を持ちやすい対象なのではないでしょうか。私の息子もその身近な星空に興味を持ち、図鑑を見たり、たまには親子で一緒に夜空を見上げたりしている日常の中で、今回、国立天文台の先生のお話を間近でお聞きできたのでした。親子で楽しく参加させていただきました。

講座の冒頭は、縣先生がなぜ星空にご興味を持たれたのかという、少しショッキングなエピソード(落ち込んで身を投げようとした自分を星空が救ってくれた。)で始まり、私も少々の驚きから聞き入りました。ただ、お話を聞いているうちにそのショッキングな内容も忘れてしまうくらいに引き込まれ、宇宙の大きさを考えれば我々が考えていることや悩んでいることは本当に小さいことなのだと改めて思いました。Mitsukaソフト(\*注1)を用いた宇宙旅行(縣先生のガイド)で宇宙の広大さを実感されると、子どもたちもどんな興味津々な表情になっていきました。「宇宙の果ての果てはどうなっているの?」「地球と似た星はあるの?」など子どもたちの心はくぎ付けとなり、輝いた目で質問する姿がとても印象的でした。私は以前よりこのMitsukaソフトをパソコンにインストールはしていたもののあまり使用できておりませんでした。いろいろな操作ができることが分かり、今後は積極的に触れていきたいと思いました。あわせて、ご紹介いただいた天体観測支援ツールSORAアプリ(\*注2)も活用して、宇宙と星空を親子で気軽に楽しんできたいと思います。

縣先生のお話で一番印象に残った言葉は「Awe, the Small Self, and Prosocial Behavior」です。畏敬の念(Awe)が生じると、自分の存在が小さく思え、人にやさしくなれるのだと。宇宙から地球を眺めた宇宙飛行士が、地球の美しさを見てそれを守りたいと思ったこと。地球が生きていて、壊れやすく、限りなく美しく、無限に貴重なものであると認識し、やはり守っていききたいと思ったこと。戦争に係る現在の指導者達に「星空を見上げてごらん。」と言えたのなら先生がおっしゃっていました。英語でAwesomeとがまさにその通りだと思いました。英語でAwesomeという言葉がありますが、その言葉には壮大な宇宙スケールのすばらしさの意味が込められているのだということを知り、改めて心に深く刻み込みました。

今回の講座を通じて、宇宙と私たちの生命はつながっているということや学ぶことができました。二足歩行から始まった我が人類は遺伝子(DNA)でつながっていて、文化・文明を創造し伝承することでつながっている。社会の中で社会と共に歩む私たちがいることを宇宙が見守ってくれているのだと。この神秘的で壮大な宇宙に私たちも生きて、つながっているということを未来ある子どもたちと語らい伝承していけたらと思います。

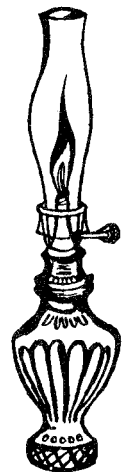
(経法ビジネス新書)

\*注1 無料の3D天体シミュレーター。空間3次元に「時間」を加えた「4次元」で宇宙空間をシミュレートし映像化する。国立天文台の「4次元デジタル宇宙プロジェクト」が開発。

\*注2 無料のウェブアプリ。位置センサーと連動すること、画面の方向に見える星空を表示できる。「子どもたちに天体望遠鏡を届ける会」と(株)アストロアーツが開発。

ブッククラブから

## 坂東眞砂子著 『神祭』

坂東 通世<sup>みちよ</sup>

日本人は困った時、神様、仏様と言って願いを唱えます。四国八十八箇所巡りは空海が四国を結界で守るために作ったという説があります。仏の結界で何を守ろうとしたのでしょうか？ 私は神様だと思っています。

眞砂子さんの『死国』は八十八箇所を逆回りと死者が蘇るというお話ですが、黄泉の国から妻を取り戻そうとするイザナキの話を思い出させませんか？

実は私は、坂東眞砂子さんとはいとこの間柄で、今回のブッククラブで坂東さんの短編集『神祭』を扱うということを知り、参加することになりました。今回の作品の舞台である高知県は私にとっても生まれ育った身近な場所です。

高知平野の西の端に眞砂子さんの生まれ故郷である斗賀野があります。今は佐川町に吸収されていますが、今でもJRの駅名は斗賀野です。『神祭』で登場する汽車の線路は、斗賀野駅をイメージしたと思われる嬉才野駅<sup>きさいの</sup>を出て西に向かうとすぐに山に隠れてしまいます。

そのトンネルの先に四万十市（旧名中村市）があります。土佐は平安時代に貴族の流刑地となっており、街には平安京のように碁盤の目状の通りが配置され、小さいながらも京都と同じ大文字の送り火が祭りとして現在まで残されています。

高知には特に四万十市地域を中心に夜這いの風習がつい最近まで残されていました。

推測するに今の大河ドラマでも登場する男性が夜女性

宅を訪れる貴族の風習をもとにしているのではないかと思います。高知には公家言葉が崩れたような方言が多々あります。さらに、あのよさこい踊りの「よさこい」は「夜さこい」という意味で夜這いの歌という説もあります。『火鳥』に出てくる「みき」の奔放な性の背景には夜這いの風習があり、「みき」が特別に奔放な女性というわけではないという気がします。

子どもの頃、高知市の山際の集落で親と子どもが裸足で炭、薪を背負って山の方から街に出てきて、夕方、体いっぱい鍋釜、道具類を身につけてランコロン、ランコロンと背中鍋釜の音をたてながら山の方に帰って行く姿を年に数度見ました。親からは「山家」の人々と呼ばれる炭焼きを生業とする山の人達だと聞かされていました。

おそらく、高知のどの地域の山際の集落でもそのような光景に出会わせていたと思います。そして今では差別的な表現となりますが、「山の女はあれが好きで知恵遅れ」という噂が当時ありました。『紙の町』の舞台は佐川町の一つ東側の町の町だと思っています。いのは紙の町として知られていましたが、そのいの町から先の山奥には「山家」の集落があったのではないのでしょうか。眞砂子さんものの町の山奥の神社で行われる奇妙なさぎ鳥の祭りを見に行ったと話していました。そのようなことを思い出すと、本文の中で「ちくと、ここが弱い女でのお」と表現されていた主人公「ヒサ」の奔放な性は単なる「知

恵遅れ」ではないのかもしれませんが。

眞砂子さんの母親である美代子叔母さんから眞砂子さんが亡くなった時の話を聞きました。

2013年の大晦日に突然眞砂子さんからお正月に高知に帰りたいという連絡があつて何とか航空券を手に入れた、斗賀野の実家に連れ帰ったそうです。

帰った途端、急に元気になり、友達に会いたいと次々に電話をかけその辺りを動き回っていたそうです。

それからは、とても医者から余命いくばくと言われた病人とは思えない立ち居振る舞いで周囲の人たちを驚かせ、叔母さんも、ご近所の人たち、友人たちもみんなすっかり、病氣というのは間違いだつたのだと本当に思ったのだそうです。

そして『神祭』にも出てくるお正月の皿鉢料理<sup>さわち</sup>を囲んでの宴の後、突然容体が急変し、あつという間に亡くなつてしまったのです。

『神祭』の鶏の本体は世間、世界の藪の中を駆け巡った眞砂子さんで、やっと斗賀野に残された首と繋がりを生を閉じたのではないのでしょうか。

「接ぎ木をするように骨が胴体につながったとたん、鳥の羽も肉も消え失せた。一瞬の間に骨と化した鶏はその場にわらわらと崩れていき、かられた稲穂の上で動かなくなつた」。

……だとすると、鶏の生血を舐めて幸せを掴んだ人は一体誰だったのでしょね。

(角川文庫)

## 新着図書から

## 〈総記〉

女性と図書館

青木玲子 (日外アソシエーツ)

010

柚木沙弥郎美しい本の仕事

柚木沙弥郎 (パイインターナショナル)

022

## 〈哲学 心理学 宗教〉

恋愛ってなんだろう？

大森美佐 (平凡社)

141

日本に暮らすムスリム

嶺崎寛子編著 (明石書店)

167

## 〈歴史〉

「烈女」の一生

はらだ有彩 (小学館)

280

## 〈社会科学〉

現代韓国を知るための 61 章

石坂浩一編著 (明石書店)

302

パリから見た被災の世紀

竹原あき子 (緑風出版)

302

ケベックを知るための 56 章

日本ケベック学会編 (明石書店)

302

渡辺治著作集 13 巻

渡辺治 (旬報社)

308

知的障害者と「わかりやすい選挙」

堀川諭 (生活書院)

314

武器としての国際人権

藤田早苗 (集英社)

316

同性婚と司法

千葉勝美 (岩波書店)

324

かくして、死刑は執行停止される

菊田幸一 (作品社)

326

開かれた入管・難民法をめざして

安藤由香里 (日本評論社)

329

ニュースがわかる国境学

増田ユリヤ (KADOKAWA)

329

悩んでも迷っても道はひとつ

村上一枝 (小学館)

333

「社会学」としての鶴見俊輔

寺田柊也 (晃洋書房)

361

「げっけいのはなしのちのはなし」から広がる世界

大石真那 (みらいパブリッシング)

367

ジェンダー史 10 講

姫岡とし子 (岩波書店)

367

母にはなれないかもしれない  
中村哲さん殺害事件実行犯の「遺言」

若林理央 (旬報社)

367

コード私たちの多様な語り

乗京真知 (朝日新聞出版)

368

双葉町不屈の将 井戸川克隆

澁谷智子編 (生活書院)

369

涙にも国籍はあるのでしょうか

日野行介 (平凡社)

369

なぜ学校で性教育ができなくなったのか

三浦英之 (新潮社)

369

包括的性教育推進法の制定をめざすネットワーク編 (あけび書房)

375

ママは駄菓子の子じゅえんや

西郷南海子 (かもがわ出版)

379

朝鮮半島の食

守谷亜記子編 (平凡社)

383

## 〈自然科学〉

地図バカ

今尾恵介 (中央公論新社)

448

いのちのそばで

徳永進 (朝日新聞出版)

490

発達「障害」でなくなる日

朝日新聞取材班 (朝日新聞出版)

493

ぼつちな食卓

岩村暢子 (中央公論新社)

498

天井のない監獄ガザの声を聴け！

清田明宏 (集英社)

498

内にある声と遠い声

鶴見俊輔 (青土社)

498

## 〈芸術〉

生きるアート折元立身

深川雅文 (カルチュア・コンビニエンス)

702

働く女たちの肖像

・クラブ株式会社美術出版社書籍編集部

723

この惑星の声を聴く

永澤桂 (現代書館)

748

藻屑蟹

高砂淳二 (クレヴィス)

748

## 〈文学〉

川のある街

赤松利市 (徳間書店)

91

椿ノ恋文

江國香織 (朝日新聞出版)

91

わたしたちに翼はいらない

小川糸 (幻冬舎)

91

二人の美術記者

寺地はるな (新潮社)

91

大江健三郎論

ホンダアキノ (平凡社)

910

井上隆史 (光文社)

井上隆史 (光文社)

910

〈中央図書館 50 周年・公民館 プレ 70 周年企画〉

秋のナイト・ライブラリー  
本をひらく、言の葉の森とつながる

図書室ナビゲーター 小山 伸二 (詩人、書肆梓代表)・清水 美穂子 (ライター)

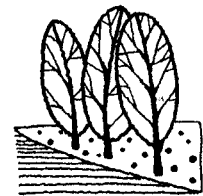
ふだんは利用できない、閉室後の夜の図書室。参加者だけの空間で好きな本・気になる 1 冊を探し出し、惹かれた一節や選んだ理由などについて、コーヒーやお茶を傍らに語り合ってみましょう。

たくさんの本と出会い、人生を豊かにしてきた小山さんと清水さんのお二人を図書室ナビゲーターにお迎えし、本と向き合う「コツ」や愉しみについてもお話いただきます。

秋の夜長に向けて、自分の世界をちょっぴり広げる言の葉の森に出かけてみませんか。

◆とき 9 月 13 日 (金) 夜 7 時～9 時

◆ところ 公民館 図書室 ◆定員 12 名 (申込先着順)

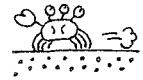
詳細は公民館だより  
8 月号をご覧ください

図書室のこころ

『文学作品をへケア』で読み解く』

—弱さを抱きしめ、

誰かに寄り添う物語へ—



お話 小川公代 きみよ (上智大学)

新自由主義的な価値観がわたしたちの日常に覆いかぶさり、自立した個人が求められるいま、一方で他者に寄り添いながら互いに関係性を結ぶ「ケア」の大切さが注目されています。

今回は、英文学者の立場から文学、映画やドラマ、人気アニメにいたるまでさまざまな作品から「ケア」を読み解かれてきた小川さんにお話を伺います。例えば、『アンネの日記』。強制収容所から唯一生き残った父・オットーが編集した初版にはなかったもの。それは、家庭で「ケアラー」として生きたアンネの母・エーデイトに彼女が寄り添い、家父長的な考え方に抗おうとしたことを記した箇所でした。

さまざまな作品に著された「ケア」に触れ、知ること、一人ひとりが支え・支えられて豊かに生きる社会へのヒントになればと思います。

〈小川さんの本〉『ケアする惑星』『翔ぶ女たち』(ともに講談社、『世界文学をケアで読み解く』(朝日新聞出版) ほか多数…

とき 9月15日(日) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 8月13日(火) 朝9時〜

電話またはホームページより申込

公民館 ☎(572)5141



〈私の本棚から 第5回〉

リヒャルト・ワーグナー著

『ベートーベンまいる』



鍛冶 勝

著者のワーグナーは、十九世紀のドイツが産んだ、オペラ作曲家にして、楽劇の創始者、リヒャルト・ワーグナーその人です。ワーグナーは、小説家でもありました。

まだ何者でもなかった若き日のワーグナーの分身は、ある日、尊敬するベートーベンに会いに、ドイツから、当時ベートーベンが自宅を構えていたウイーンへむかいます。その大旅行のてん末を、ワーグナーは、自身の音楽論を展開する、一個の芸術小説に昇華させました。

芸術論を展開する小説に、文豪バルザックの『知られざる傑作』と、芥川龍之介の『秋山図』があります。小説家ワーグナーの『ベートーベンまいる』—まいるは、参り。参上すること—is、小説の結晶度こそ、日仏の傑作に一步をゆずります。が、開陳する芸術論において引けはとりません。

文豪の二作が、冒頭から狂気の芸術論を展開するのにくらべて(そういえば、バルザックの『知られざる傑作』と、芥川の『秋山図』は、組み立てが似ていると思いませんか?)、ワーグナーの小説はユーモアが横溢しています。

ベートーベンを心の師と仰ぐ無名時代のワーグナーの分身は、貧乏ゆえに馬車が雇えず、ベートーベンの自宅まで千キロの道のりを徒歩で行きま

す。肉体的な労苦を厭わない情熱のワーグナーと、ひよんなことから連れになった、金持ちの英国紳士。芸術を理解しないこのイギリス人と、いちずなワーグナーが巻き起こす珍道中は、読ませます。が、読みどころはそこにありません。

真の音楽劇をつくるためには、「何をしなければならぬか」を、ワーグナーに問われたベートーベンは、「シエークスピアが書いたときのようにするんです」(高木卓訳)と、真顔で返します。そしてワーグナーは、ベートーベンの口を借りて、楽器と人間の声の結合が、新しい芸術を「創造する」と宣言します。

楽器と人間の声の結合とは、何でしょう? それは、ベートーベン作曲の「交響曲第九番 歓喜の歌」。ワーグナーは、あの永遠のシンフォニー「第九交響曲」の誕生秘話を、物語の力を借りて描き出したのです。ベートーベンの頭脳と感性によって産み出された「歓喜の歌」の絵ときを、ワーグナー自身がすること。

ワーグナーの音楽を理解する上で欠かせない、この短篇小説『ベートーベンまいる』は、文藝春秋が総力をあげて刊行した『アンソロジー 人間の情景』第4巻に収録されています。力作ぞろいの同アンソロジー・人間の情景は、全部で8巻。いずれも、プロの評価の高いシリーズです。よくもこれだけの名作を集めた、ため息が出ます。

『アンソロジー 人間の情景4 こんな人たち』所収 文春文庫。もしくは、『ヴァーグナー 小説集—1976—』深夜叢書社)